

G8を包囲したもう一つのサミット 若者たちの音楽は絶えなない!



写真も
藤井 創

茶番劇

「日本政府、原発十二基を南アフリカに供出、温暖化防止に貢献」、洞爺湖サミット終了翌日の新聞記事に啞然とさせられた。環境サミットといいながら、この期間中に日本政府がやっていたことは、原発をアフリカへ大量輸出し、南の大地をズタズタにする算段だったのだ。サミットに合わせるように、地元テレビ局も「原発は地球を守る」と、まことしやかに報道し、泊原発のプルサーマル計画推進に一役買っていた。アメリカもこの期間にインドとの原子力技術協定に踏み出している。これがG8のやろうとしていることの実態である。豪華な晩餐会を催しながら食料危機を論じるといふ茶番劇を演じるG8。彼らは環境対策の名の下に利権をむさぼることはあっても、環境問題の解決策を見出そうとする気はさらさらないのである。「どうやって直すのか分からないものを壊し続けるのは、もうやめてください」というセバン・スズキさん（九二年、国連環境サミットこども代表）の叫びは未だにG8には届いていない。

もうひとつのサミット

しかし、サミット期間中、真摯に環境のことを考える人たちがいた。七月五日、札幌のピースウォークに参加していた人たちだ。彼らは「原発より森を!」「泊原発増設反対!」、Love 六ヶ所、Stop 再処理工場」のプラカードを掲げて、大通り公園を歩いていった。六ヶ所、泊、横須賀……そこには、自分たちの生活

の場に横たわる深刻な環境問題に向き合っている人たちがいた。

新自由主義を共通の目的とするG8諸国は、核を保有し、世界の軍事支出の四分の三、経済生産量の三分の二を占める巨大な勢力だが、その人口は世界の十四%。彼らが世界を代表しているわけではない。しかし、国連を飛び越えて、このG8によって通貨、貿易、安全保障などの国際ルールが決められていく現状、しかも、G8の軍国主義や新自由主義の影響を被っている他の八六%の国々とそこに住む人々をのける者に行われるサミットとは何だろう。外務省は、サミットのことを「(G8の)適切な決断と措置によって：トップダウンで物事を決めること」と説明しているが、「G8の約束が果たされたことはない」と来日していたウガンダの女性は言う。なぜ一握りの人たちだけが歓迎され、自分たちの生活、生存に関わる重大な事柄への意思決定から多くの人々が排除されるのか。サミットからオミットされた人々の声こそ聞かれなければならない。その熱い思いをもった人たちが日本各地から、世界の様々などころから、北海道に集まってきた。ここにオルタナティブ・サミット——もう一つのサミット——が始まった。オルタナティブ・サミットにあつて、G8にないもの、それは民衆の視点と経験である。わたしはG8を包囲するように行われたいくつかの市民フォーラムやデモに参加して、人々の声に耳を傾けた。

「アイヌはすごいんだよ」

二風谷や札幌で行われた先住民族サミットには、世界十二

カ国から二十二の先住民の人たちが参加し、自分たちの置かれている状況やそこの闘いについて熱く語った。共通していることは、彼らがそれぞれの国の片隅に追いやられていること、そして、G8を中心とした先進国によって引き起こされている気候変動が聖なる大地を破壊し、そこに住む先住民に襲いかかっていることだ。

昨年、「先住民族の権利に関する国連宣言」が採択されたが、G8メンバーのアメリカ、カナダ、ロシアはその宣言に調印していない。日本では、国連宣言の追い風を受けるように「アイヌ民族を先住民族と認めることを求める決議」がサミット直前の今年六月に国会で決議された。先住民族サミットは、閉会の宣言でこの国会決議を「アイヌ民族の何世紀にも渡る苦闘の末の勝利」と評価したが、アイヌの人々の中には「丁寧な議論もなく、G8サミットに合わせるように成立したお飾りの決議」と懐疑的な人もいた。過去の政策に対して日本政府に正式な謝罪を求めること、教育におけるアイヌ語学習、アイヌ民族の視点を歴史教科書に盛り込むことなど課題は山積みだ。すべてはまだ出発点。だが、ようやく出発点に立てたという喜びと自民族への誇りがアイヌの方々一人一人のスピーチから伝わってきた。「アイヌはすごいんだよ」。ひとりのアイヌの女性は、小さい時、祖母からいつも聞かされてきたこの言葉のリアリティを今やつと実感したと興奮気味に語った。アイヌの人たちだけではない。様々な国・地域で自分たちの文化、権利、土地を守るために闘っている先住民の人たちが、ここにきて、その経験を語り、その闘いを共有することによって、自民族への誇りを強めていく姿に心熱くされた。

軍隊の存在する世界への毅然とした「否」

「軍隊・基地と女性」国際シンポジウムには内外の女性たちが結集した。在韓米軍犯罪根絶運動本部の高維京^{コウキョウ}さんは、韓国では二〇〇四年の米軍基地再配置協定によって米兵の数は減少しているものの、米軍の能力強化が進み、凶悪犯罪は増大しつつあることや基地周辺の甚だしい騒音の現状を紹介した。グアムの先住民族のファナイ・カストロさんは、アメリカの廃棄物貯蔵施設や基地建設により先住民の聖なる土地が奪われ、フェンスの中の生活にあこがれる若者たちが軍国主義に絡めとられていく悲しい現実を切々と語り、アメリカという監獄の中に閉じ込められてきたグアムの姿を浮き彫りにした。「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」の高里鈴代さんは、沖縄で公表されている米兵による性暴力被害者一人の背景に存在する「百人の見えない被害者」の悲しみを語り、軍人の犯罪が軍隊・軍事装置そのものの結果であり、戦闘行為と性暴力は本質的に繋がっていることを強調した。三つの国に存在する基地・軍隊の存在が、それぞれの地に生きる先住民、女性、男性、子どもたちにとっていかに深刻なものであるか、軍隊が我が物顔で闊歩する世界の現状への否が静かに語られた。

インターナショナルな牧草地

サミット開催中、サミット会場の周囲五キロは立ち入り禁止となり、プレスセンターでさえ、会場から三十キロ離れた地点に設置された。そのような中、反G8サミット北海道（アイヌモシリ）連絡会は、サミット会場から二十キ

ロ離れた伊達市の牧草地に「反サミット交流広場」を設けた。そこには二百人ほどの人々が全国から集結し、テントを張り、共同で炊事をし、真つ暗なテントの中で語り明かした。台湾から来た女性たちは、国内にある様々な人権問題への取り組みと中国との平和的統一へのビジョンを語った。韓国から来た女性たちは、現韓国政府の貧困層への激しい弾圧を指摘した。アメリカから来た ANSWER COALITIONのメンバーは、九一一事件を口実に世界に永久戦争状態を拡大するアメリカ政府の姿勢を憂慮、イラクから撤退してもイランとは戦争しようとする国会議員が多い現状を注視し、すべての戦争に反対すべきとする運動を繰り広げていた。

アメリカとの自由貿易協定に反対するフィリピンの若者たち。彼らは、アメリカのファーストフード「ピザハット、ケンタッキ、マクドナルド」の歌と振り付けを披露し、この振り付けのアクションがどんどん大きくなり、瞬く間に巨大化し、アジアの地場産業を押し潰していく新自由主義の現状を、ユーモアを交えて表現した。ひとりの男性が語った言葉が印象的だ。「わたしたちは自分の作っていないものを食べなくてはならず、自分の作ったものを食べることができない」。

豊浦のオルタナティブ・ビレッジ

伊達のキャンプ地には、豊浦森林公園のキャンプ場がもめているという情報が飛び込んできた。そこに居合わせた雨宮処凛さんがその模様を記している。

キャンプ中は、毎日デモとミーティングが行われた。最初、ワーキンググループから出された案は、なんと連日朝八時から午後四時まで二十二キロのデモ……三日連続二十二キロのデモはキツすぎる。キャンプ初日の六日は、G8初日の行動についてどうするかが話し合われ、議論は朝四時まで続いた。国も運動のやり方も戦術も、それぞれの国の「自由度」も違う人たちが丁寧に合意を形成していく、その過程に立ち会えたことはあまりにも刺激的な体験だった。安易に多数決に流れず、一人一人の意見が尊重される場所。そんな超民主主義は、「合理的」じゃないし時間がかかる。だけど、こっちの世界で切り捨てられてしまうような声が尊重される話し合いの場所に、「もうひとつの世界」は確かに出現していたのだ。議論に疲れ気味の人もいたが、多くは、「デモクラシーのABCに立ち会っている」と、この場にいることに興奮していた。

もめる。豊浦キャンプの夜に居合わせることができなかつたことが心残りではない。ここには、フェミニスト・アンド・クイア・ユニット(FQU)というセクシユアル・マイノリティのグループも来ていた。キャンプでは「クイア映画祭」も開かれたようだ。彼女らの主張は明快だ。

多くの人々の生活を支配することで、利益と権力を持つちつづけようとする動きの前に、わたしたちは抵抗します。わたしたちは少数の「リーダー」による経済や社会のとりきめが、女性やクイアにも苦しみを与える

だけでなく、女性やクイアの生き延びてきた経験やたかってきた記憶をも消し去ってしまうことを知っています……わたしたちは、他の誰かの価値を勝手に決めたり、誰かがそうされるのを見てみぬふりをしたくありません。友人は、スカートをはかなかつたことで仕事を奪われ、別の友人はスカートをはいたことで仕事を奪われました……まず、わたしたちは世界中でおこっている、政治や経済から私たちの性別、ジェンダー、セクシユアリティにいたるまで「勝手にきめられた」「決めつけられた」ことの前に屈さず、抗った数々の経験に耳を傾けることからはじめたいと思います。それは「もうひとつの世界」への招待状だと思います。昨年のドイツの反G8の運動では、フェミニストやクイアが積極的な位置をしめていました。日本の運動ではそれができません。なぜでしょうか？

「協力」という名の「強制」

雪国札幌にも百人以上のホームレスの人たちが存在するが、六月下旬、多くの野宿生活者たちが寝泊まりしていた市内のバスターミナルから排除された。「ここがダメだったら、行き場がない」という野宿生活者の叫びも、G8警備強化という大義の前にかき消されていった。この小さな排除がG8過剰警備の序曲となった。

英タイムズ誌が「三年前のイギリスでのサミットの費用は今回の十分の一」と批判したように、洞爺湖サミットには六百億円もの費用が投じられたが、その半分の三百十二億円が警備に充てられた。全国から二万一千人の

警官・機動隊が動員され、イージス艦「こんごう」をはじめとする陸海空の自衛隊による対テロ戦争に準じる軍事展開まで行われた。八年前のサミットの時にも沖繩に一週間滞在したが、その時も、警官・機動隊が全国から三万人召集され、車が検問で止められたり、デモに参加した時、警官に無断でバッグを触られたりする経験をした。今回も札幌市内で二回、千歳空港で二回、車を止められ、「免許証を見せろ」、「トランクを開けろ」と取り囲まれた。「プライバシーが侵されたくないの」と言って拒否し、何回かの押し問答の末、「もしわたしがどうしても見せたくないと言っ

て拒否したら、どうしますか?」と問うと、「あくまでも協力をお願いしている」というだけで、通過を阻止されたり、拘束されることはなかった。警官にはわたしの免許証やトランクの中身をチェックする権限はないのである。それにもかかわらず、彼らは我が物顔で通りを闊歩して市民を怖がらせ、協力という名目で警備を強制し、市民の免許証や持ち物を法律に反してチェックし続けたのである。

若者の音楽は絶えた

七月五日の札幌のピースウォークでは、デモ参加者四名が逮捕される現場に遭遇した。メディアは、デモ参加中の

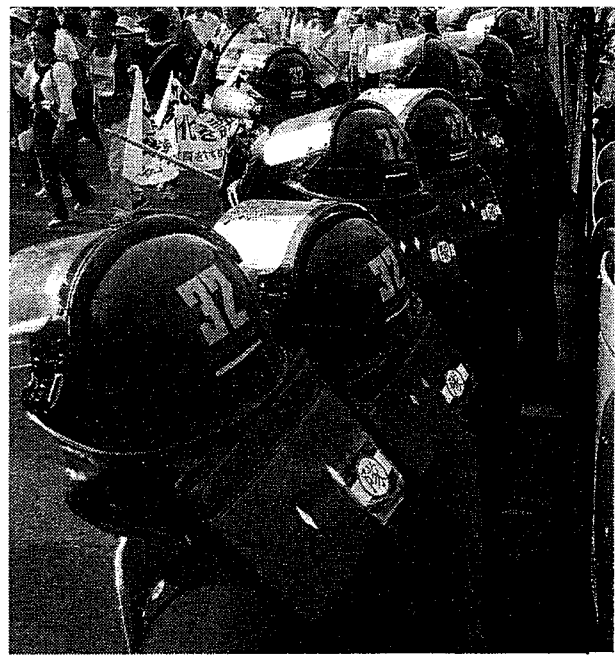
サウンドカーの運転手が警官の前進命令をきかず、車体を警官にぶつけたため逮捕されたと報じた。しかし、実際は警官数人が車の前

に立ちふさがって車の前進を妨害し、運転席側の窓ガラスを二人の警官が棍棒で叩き割り、運転手を無理矢理引きずり出したのだった。運転席のハンドルには痛々しい血痕が残っていた。一人のカメラマンも、その騒動を取材中、後ろから警官にシャツを引っ張られ、その弾みでその警官を蹴ったとして逮捕された。非暴力をかかげるデモに威圧的な態度で挑みかかり、平和的な表現手段である音楽を暴力的行為で抑圧した警官。罪のない人たちの不当な逮捕劇。リズムに乗った陽気なデモが暗転、若者の音楽は絶えた（哀歌六五）。

しかし、後日、酪農学園大学のクラスでデモの様子を伝えると「先生があんなデモに参加していたなんて驚きだ」、「デモをする人たちは爆弾を持っていたり、物を投げつけてる暴力的な人たちだから、逮捕されて当然だ」という学生たちのコメントが返ってきた。あんなに楽しい、平和的なデモなのに、若者たちの中にはメディアによって、デモとは暴力的なもの」というイメージだけが刷り込まれていく。スーザン・ジョージは「欧州や北米のメディアは、新自由主義に対して人々が抗議したり、抵抗することを明らかに潰すという意図を持っている」と言っているが、日本のメディアも同様である。

伊達のキャンプ組が有珠町の漁港周辺をデモした八日も、警官が最初から色めき立ち、デモのコースを一ミリでもはみ出そうものなら、「市民の安全を守るために」、体をぶつけるように圧力をかけてきた。（ちなみにわたしたちが歩いた道には、わたしたちの他、「市民」は誰もいなかった）。このような圧力はこれまで歩いた名古屋や沖繩のデモ





でも経験することのなかった暴力である。若手の機動隊員の作る盾の壁に少しでも隙間ができればよいものなら、上官が大声をあげて叱りつける様子は、さながら警察権力による国民監視の訓練を想わせた。九一一事件以降、アメリカに倣うように軍備増強と国民監視へと傾く日本政府にとつて、G8警備は恰好の練習台だったのだ。

若者たちのこころに歌が！

米軍基地の重要性の確認と強化——沖縄サミット開催の目的はかなりはつきりしていたと思う。今回の洞爺湖サミットの意図は何だったのだろうか。八年前、地元でサミットを経験した沖縄の男性は「日本に支配されてきた琉球の視点から見る時、北海道もまた日本に支配されたアイヌ民族の地。日本政府はこれら二つの被支配者の地にサミットを押しつけ、そこに生活する人々に犠牲を強いたのだ」と語った。この侵略された側の視点から言えば、今回のサミットのねらいは、北海道の沖縄化にあったといえるかもしれない。

沖縄サミットでは、二万七千人が手を繋いだ「人間の鎖・嘉手納基地包囲行動」という歴史に残る市民運動が行われたが、今回は三千人規模の札幌ピースウォークが注目を集

めた程度だった。しかし、沖縄サミット以上に、サミットの存在意義に疑問符がつけられたサミットであったことは確かだろう。G8が共通の目標として推進してきた新自由主義が破綻し、世界をリードしてきたかに見えた「西洋型モデル」がもはや機能しない現実が白日の下にさらされている。そのことを確認するように、サミットの周りでは市民やNGO団体によつて、G8とは違う「もうひとつの道」を示す様々なフォーラムや活動が行われ、沖縄の「人間の鎖」とはまた違った形でG8を包囲していったのだ。このような市民による「地球規模で正義を求める運動」は、もうすでにG8サミットを凌駕しているのかもしれない。

伊達の牧草地の夜。テントに潜り込んでいると、他のテントで熱っぽく語り合う若者たちの声が聞こえてきた。「社民党も共産党議員も、札幌までは来たが、このキャンプ地まで来る政治家は誰もいないじゃないか。貧しい人たちの立場に立った政治なんて口だけだよな。政治家はここに来て、俺たちの話を聞くべきだ。G8のメンバーこそ、ここに来て、俺たちと話し合うべきなんだ」。次の日、有珠町漁港でのデモを終えてキャンプに戻った夕方、疲れ切つてうとうとしていたら、ドイツから来たパンクロッカーたちのギンギンのロックが牧草地に響き渡った。日本とフィリピンと韓国と台湾とアメリカの若者たちは踊り出し、飛び跳ね、笑い転げ、牧草地を走り回った。若者たちの音楽は絶えない！若者たち、そして、わたしたち一人一人の内から溢れてくる燃え尽きることをないエネルギー、笑い、歌、そして、正義への熱い思い。それを信じていきたいと思う。

(ふじい・はじめ 酪農学園大学教授)